

## オーボエ・ソナタ 分析

単一楽章の大きなソナタ形式であると同時に、「ソナタ」、「スケルツォ」、「アダジッシモ」、「フーガふうロンド」といった4楽章形式と考えることもできる。

### 単一楽章形式

#### 【提示部】 第1主題

第1小節～ 第1主題の提示。ニ長調（転調的）。4分の3拍子。  
（第3小節からのピアノのベースラインは、半音階下行のモチーフ）  
第21小節～ 第1主題の確保。（ピアノのベースラインは全音音階下行のモチーフ）  
第36小節～ 第1主題の終結部（小展開）。  
第53小節～ 推移部（第1主題の小展開）

#### 第2主題

第62小節～ 第2主題（第1主題より派生）の提示。嬰へ長調→イ長調。伴奏部は4分の4拍子→4分の3拍子。

#### 終結部

第79小節～ 第2主題の終結部（第36小節からと類似）。  
嬰へ長調→嬰へ短調。

#### 反復—第1主題

第85小節～ 第1主題の提示。単純化。ニ長調。  
第96小節～ 中絶。偽終止により変ロ長調。

#### 挿入部

第101小節～ 変ロ短調。スケルツォ。8分の6拍子。  
第121小節～ スケルツォ主題。  
第125小節～ スケルツォ主題。イ短調。  
第141小節～ 変ト長調のV度音保続（第2主題の準備）。

#### 反復—第2主題

第150小節～ 第2主題の提示。変ト長調→重変ロ長調。4分の3拍子。伴奏部は8分の6拍子→4分の3拍子。

#### 反復—終結部

第167小節～ 提示部の終結部。変ト長調。

#### 【展開部】 第1部

第181小節～ 第1展開部。ニ長調。スケルツォ主題から敷衍された主題。

#### 第2部

第258小節～ スケルツォ部の再現。  
第274小節～ スケルツォ主題の再現。単純化。変ロ長調。  
第290小節～ スケルツォ主題の確保。ト短調。  
※第307小節の終止線は、楽章の終止を表すものではなく、306、307小節で終止感があるような演奏を望むためのもの。間髪置かずに第308小節に進む。

### 4楽章形式

#### 【第1楽章（ソナタ Sonata）】 第1主題

第1小節～ 第1主題の提示。ニ長調。4分の3拍子。  
第21小節～ 第1主題の確保。  
第36小節～ 終結部（小展開）。

#### 第2主題

第62小節～ 第2主題の提示。嬰へ長調→イ長調

第79小節～ 終結部（小展開）。

#### 第1主題再現

第85小節～ 第1主題の再現。ニ長調。

#### 【第2楽章（スケルツォ Scherzo）】 第1主題

第101小節～ スケルツォ第1主題。変ロ短調。8分の6拍子。

#### 第2主題

第150小節～ スケルツォ第2主題の提示。変ト長調→重変ロ長調。

#### トリオ

第181小節～ スケルツォのトリオ。ニ長調。

#### 再現部

第258小節～ スケルツォ部の再現。変ロ長調→ト短調。

**【再現部】 第2主題**

第310小節～ 第2主題の再現。嬰へ長調。4分の4拍子。  
第320小節～ 第1主題の疑似再現。嬰へ長調→ニ長調（主調）。

**挿入部**

第336小節～ フーガふうロンド。第96小節のフレーズによる。  
4分の3拍子。

**第1主題**

第393小節～ 第1主題の完全な再現。

**【第3楽章（アダジッシモ Adagissimo）】**

第310小節～ 緩徐楽章の第1主題（ソナタの第2主題の再現）。  
嬰へ長調→ニ長調。4分の4拍子。第2主題はソナタの第1主題。

**【第4楽章（フーガふうロンド Rondo alla Fugato）】**

ニ長調。4分の3拍子。

第336小節～ ロンド形式の「A」。フーガの提示部。

第339小節～ 第2声の入り。

第342小節～ 第3声の入り。

第354小節～ ロンドの「B」。ロ短調。フーガの嬉遊部。カノン。

第368小節～ ロンドの「A」。ト短調。フーガの提示部。

第373小節～ ロンドの「B」。へ長調。フーガの嬉遊部。

第393小節～ ロンドの「A」。ニ長調。

第408小節～ フーガの「ストレッタ」。

**【エピローグ】**

第424小節～ 引用1。歌曲「くちなしの実」（野呂昶作詞）。このソナタの主題はこのメロディーと密接な繋がりがあり、すべてはここに向かっていたということが明らかになる。

「いちめんの雪げしきの中で くちなしの実だけが赤い」。

若くして命の灯が絶えてしまった人が、かつて、くちなしの木を贈ってくれた。そこに今年も赤い実がなった。くちなしの実は、亡くなくてもなお赤く灯された「命」そのもの。この作品での「ソナタ」、「スケルツォ」、「アダジッシモ」、「フーガふうロンド」という4つのシーンは、それぞれに、人生の、命の、様々な側面を浮き彫りにする。命の実のソナタ。

第435小節4拍目～ ピアノに引用2。歌曲「ふたりしずか」（野呂昶作詞）。

「うまれたときから ふたりはむかいあって さいっていました」。

一人ではない。愛。

**解 説****初演のプログラム・ノートより**

「調性有り、引用無し、サン＝サーンスやプーランクなどの系譜を継ぐソナタを」と、熱く熱く委嘱の声をかけられたのは、2014年の暮れのことだった。

作曲家にとって「ソナタ」とは、特に室内楽の分野にあって、自身の力量を世に問うものとして重要な意味があった。また楽器奏者たちにとっても大切なレパートリーだ。が、変貌甚だしい現在にあって、ソナタがどれだけ必要とされているのだろうか。今は、軽めの音楽であるとか、映画音楽ふう、劇音楽ふう、はたまたゲーム音楽ふうの、映像を伴う音楽が好まれるきらいがある。

西洋音楽は、ある一定の時間を音のみで構築する芸術だと思っている。そしてその豊穡な世界は、「ソナタ」無くしては語れまい。

演奏時間13分強の単一楽章の楽曲を、規模の比較的大きなソナタ形式で構成し、その中にスケルツォ、緩徐楽章、フーガふうロンドを包括するという、重層的な構造に仕上げた。すべては冒頭に現れるオーボエのメロディーから派生。この曲に登場するメロディーはいずれも、よくありがちな普通のメロディー。それが、まず展開（あるいは変奏）された形で現れ、しばらくたって後に完全な形で現れ

るという仕掛け。いちばん最後に一つだけ意図的に短い引用あり。ぼくの歌曲から。するとこのソナタは、実はこの最後の歌に向かっていて、ということになる。

**演奏のアドヴァイス**

本来ならば、詳細にダイナミクスやテンポの変化などを楽譜に記しておくべきだが、なるべく最小限の記述に留めた。作品を分析することで自ずと見えてくる演奏表現を心がけてほしい。もしかしたらクレシェンドと書いてあるところで、ディミヌエンドする可能性もあるだろうし、音楽が揺れ動くこともあるだろう。

宮村和宏氏（東京佼成ウインドオーケストラ副コンサートマスター）委嘱。

2017年2月17日（ヤマハホール）、宮村和宏オーボエリサイタルにて初演。

オーボエ：宮村和宏 ピアノ：鈴木優人

演奏時間：13～14分